

# 「原発とアスベスト

## ——この似て非なるもの」

国 松 靖 弘

今年3月11日に起きた、未曾有の東日本大震災以来、テレビなどで白の防護服を見る機会が増えました。そのたびに私は、原発とアスベスト（石綿）が似通っていることを意識せざるを得なくなりました。具体的にどこが似通っているのか、いくつか挙げてみたいと思います。

まず、両者共、目に見えない点。放射性物質の一つであるセシウムは0・00006マイクロン、アスベストは0・02から0・06マイクロンといわれています。アスベストでさえ、髪の毛の5000分の1という気の遠くなるような小ささです。

次に飛散性がある点。目に見えない小ささなので、風に乗って途方もない距離を飛んでいくのです。今回の原発事故によって、放射性物質が数百キロ離れた場所まで飛んで

行ったことに誰もが驚いたはずですが、アスベストも同様に飛散性があり危険なので、解体する建物にアスベストが使用されていることが分かった場合、作業計画を作成し、所轄の労働基準監督署への届出が義務付けられています。さらに数十年にわたり重い病が発症する点。1986年のチェルノブイリ原発事故の場合、20年以上にわたり甲状腺ガンなどの発症が増えています。アスベストの場合にはさらに顕著で、アスベスト関連のガンである中皮腫の死者は、1995年に500人でしたが、2000年に710人、2006年は1050人と1000人を超えたのです。2009年は前年より14人減って1156人でしたが、2010年は前年比53人も増え、過去最悪の1209人となっています。多くの中皮腫の潜伏期間は20から40年といわれています。

最後に、両者共、国策により推進された点。原発はクリーンで発電コストが安いとされ、国策として全国で54基も建設されてきました。アスベストは、耐久性、耐熱性などに非常に優れ安価であったため、「奇跡の鉱物」として重宝され、建設資材、電気製品、自動車、家庭用品等、様々な用途に広く使用されてきました。1970年から1990年の間、国策として年間約30万トンものアスベストが輸入されたのです。

ざっと見ても、これだけの類似性があるのですが、今度は逆に両者の違いについて述べてみます。

まず、歴史の差です。原発に関しては、既述した1986年のチェルノブイリの事故が起点になっており、まだ25年しかたっていない。

それに対しアスベストは、1890年代に日本への輸入が始まり、アスベストのばく露によっておきた肺線維症であるアスベスト肺は1937年に、アスベストばく露による肺がんは1960年に、中皮腫は1973年に報告されています。最初の発症から74年もたっているのです。

さらに公害としての形態の違いです。公害は、立命館大学の宮本憲一客員教授が提唱されている、「フロー公害」と「ストック公害」に分類されます。

例えば水俣病の場合であれば、汚染物質を排出する企業

の製造工程を止めれば公害はなくなります。これを従来型のフロー公害といいます。

しかし、アスベストの場合はストック（蓄積）として生活環境に入り込み、そこで長期にわたって被害を出し続け、単純な解決策がとれないので、ストック公害というのです。原発の場合は、フローとストックの混合型といえます。

さて、ここまで原発とアスベストの類似点と相違点について述べてきましたが、最後にここから何が見えてくるのかについて述べてみたいと思います。

まず、フローとストックの混合型である原発については、新規建設というフローを止めることが必須です。再生エネルギー普及とエネルギー効率の改善により、段階的に原発ゼロに向かうべきです。もちろん、なぜ原発をやめるのかを始め、どのようなタイムスケジュールで実施するかについてなど、徹底した国民的議論が必要不可欠となります。

フローを止めてもストックは残ります。そのストックから、汚染廃棄物の処理や健康被害の問題が発生します。これらの今後起こり得る問題について、先例であるアスベストの事例を、良い点悪い点を含め参考にするのが肝要です。既述しましたように、アスベスト問題の歴史は長く、その規制や健康被害について多くの先例があるからです。

その中で今年の8月、大阪南部の泉南地域に点在してい

た元石綿関連工場の労働者らの賠償訴訟に対し、大阪地裁は国の責任を認めない逆転敗訴の判決を言い渡しました。国策として推進され使用されたアスベストの場合、人々の健康より経済効率性を優先する、時代に逆行した判決もあり得るのです。原発問題の反面教師とすべき判決です。

最後に、今回の原発事故を契機に、わたしたちはアスベスト問題について、そのとてつもない重大性を再認識すべきであると考えます。

アスベストはそれ自体に化学的な毒性があるわけではありませんが、繊維が粉じんとなり、吸引されて肺の組織に刺さると溶解せずに残り、中皮腫やじん肺などの原因になるのです。そして20から40年の潜伏期間を経て発症するのです。これが「静かなる時限爆弾」と呼ばれるゆえんです。日本にはこのアスベストが1000万トン以上輸入され、ストックとして国土に組み込まれているのです。さらに海外では、中国やロシアでいまだに大量のアスベストが使われています。

「静かなる時限爆弾」といわれるアスベストは、既にこの地球上に埋め込まれていて、適切に処理しない限り、ずっと居座り続けるのです。

日本では、1970年から1990年にかけてアスベストが使われた建物が、2020年から2040年にかけて建て替えのピークを迎えます。

皆さんの解体工事が繰り返されれば、20年後、40年後にまるで時限爆弾のように中皮腫などの重い病気が発症することになるのです。

日本では2040年までにこれらの病気による死亡者は10万人に上ると予測されています。世界保健機関(WHO)は、世界で1億2500万人の人々が職場でアスベストにはく露していると報告し、国際労働機関(ILO)は、アスベスト関連の疾病で毎年10万人の労働者が死亡すると推定しています。

ですから、適切なアスベスト処理をしない、皆さんの工事を横行させてはならないのです。

わたしたち人類は、結果としてこれら二つのとてつもない負のストックを抱えてしまいました。しかし自ら抱えた問題は、自ら解決するしかありません。

地震は誰にも止められません。しかし、原発とアスベストは私たちの強い意志で止められるのです。今こそ、「経済効率性」ではなく、「人類の生命・健康に対する安全性」というグローバルな正義を基盤にして、これらの問題を克服していくことが求められていると思います。日本はこの震災を契機に、このような新たな方向にシフトすべきであると痛感する次第です。